

## 花の森（二）

土田龍太郎

賀茂真淵その伊勢物語古意にて花の林の歌を解き明むるさまいとねもころにて、萬葉集の歌ども引き比べつづくさぐさのことに説き及べり。

この縣居大人また雲のかくろふはかくさふの誤りなりと記せり。さらに大人の一首のおもむきを雲が花を妬めるころにとりなせるは、右に掲げし註釋のたぐひにさしも變れりとも思はれず。

近き世の伊勢物語註解とりどりなる中に、今も人のことにめでたふとぶはかの鈴屋大人に就きて學べりし藤井高尚のものせる伊勢物語新釋なるべし。この高尚、雲のたちまちかくさふはと讀むを正しとせりと言へるは、なほ古意の説に倣ひたるにやあらむ。一首の心を解けるさまざま賀茂翁に同じくて、花の林のうつくしきが人に見はやさるるをうしと思ひて妬みてなりけりと述べたり。

この新釋にても狂雲妬佳月の一句を示すこと、右にけみせし山口抄肖聞抄惟清抄拾穂抄臆斷に異ならねば、花の林の一首に寄せて同じ詩句を引くこといつか慣はしとなりけるにたり。この慣はし宗祇法師に生まれりやおぼゆれども、しかとは定めがたかるべし。そはいかにてもあれ、この一句、昔男の歌の心になへりとしも思はれず。雲の月を妬むと雲の林を妬むと、言の葉のおもてにてこそさも似たれ、ことの心いたく隔れりといはではあるべからず。

今の世のもの知り人の著せる伊勢物語註解またあまたあれども、生駒山の花の林を詠める一首につきて勘ふるに、おほかたは古き註釋に説けるをさながらまねぶのみにて、雲が咲く花を妬める心にとりなしてことたれりとせるはあかずおぼゆることこよなし。

かかる解きやう後成恩寺禪閣に生まれりやいなや、しかと知らむよすがとてなければども、才學一代に雙びなかりしかの禪閣のただかりそのめ想ひ測りのやがて定まれる説のごとくなりて、後れて世に出でし註釋家のただそれになびき従ひけむことさしもあやしむにたら

ざるなり。

雲にも人のごとくに情けありやに詠みなせること詩歌の上にてはさらにめづらしからず。さはれ雲が白く咲ける花をことさら妬むゆゑよしありとせむはさすがなだらかならず、なにとやらむしひごとめき耳にさかひて聞ゆる心ちさへするぞわりなき。されば昔男のこの一首にこめしもの心を尋ねむとせば、右に名を列ねし諸家の釋義にはゆめなづむべからず。いと異なるすぢより考へたどらむほかよきたよりありともおぼえぬなり。

一段の草子地にて、和泉國へ二月ばかりにいきけると言へるところあれど、今ことに心をつけであるべからざるはこの二月の二文字に他ならず。如月のころま白く咲ける花の面影を述べたるにしたがひておのづと思ひ起さるるは、古へ天竺拘尸那（クシナ城北郊娑羅樹さらじゆの下にて二月十五日に釋迦牟尼世尊の般涅槃はつねはんに入りたまひしときの奇しきありさまなり。この夜佛陀つひにみまかりたまひし刹那、娑羅樹林の花の色たちまち雪のごとく白く變りて、その園のけしきさながら鶴林に見まがふばかりになれること、さらにその時、諸天人間鬼神のみならず鳥獸のたぐひまでも天地のかき聞せるがごとく父母を喪へるがごとくに嘆き悲しみ泣き惑ひぬることつばらに説ける經文すくなからず傳はりたり。

一首のはじめにきのふけふといへるは、二月十五日のころを指せるにてもやあるらむ。されば生駒の山の木々にをりしもかかれる白雲さながら娑羅樹の花ににたれば、この雲の立ち居の定まらぬは、雲にも情ありてかの佛陀入滅の時の憂き悲しきことのおのづと思ひ出されて身のおきどころなきまでに心ち惑へるがゆゑにてもあるべし。一首のおもむきかく解きたらむはいともすなほにてすぐにむねに落ちいりぬべければ、雲の花を妬むさまにとりなさむにははるかに勝れりといはでやはあらむ。

伊勢物語の歌にまれ草子地にまれおほかた今めかしからず、神さびてさへおぼゆるは神祇に關れるところ少からぬがゆゑならざらむやも知れがたし。惟喬親王の御髪下みくししたまひしこと、はた女御多賀幾子たかきこの失せたまひて安祥寺にてみわぎしけることなど記せれば、佛の御法みのりとさらにゆかりなしとはいふまじけれども、釋教の歌と定かに見なすべきものありと

せば花の林の一首をおきてほかになきにたり。

おほかたの註釋家の花の林の一首を解き明めむに、娑羅林のことに心づかみやみにしはいともいぶかし。ことにあやしまるるは臆断の説にほかならで、かの圓珠庵契冲、かつて東密の奥義を究めて阿闍梨位にも昇れりしゆゆしき學侶の身なれば、如月の雪の花の林といへるままにやがて般涅槃のこと思ひ偲ばではあるまじきに、さはなくて一首を説くにありきたれる古抄にのみはら随ひてやみぬることいとも心えがたしといはでやはあらむ。さるは伊勢物語の物法との因み文のおもてにてはあらはにえ窺はれねば、娑羅雙樹のこと阿闍梨のひたと思ひ落しけむやも測りがたし。

かく昔男の歌につきて娑羅林に心つきたるはわがいさをしにてはつゆあらず。古く源經信がものせりといへる伊勢物語知顯抄の内に一首のおもむきを佛滅によそへて解けるところ見えて、そこにてはこれは昔釋迦如來のかくれたまひしとき、御はかのうへの林たちまぢかくれて白花の咲けるがとごくなりたりと記せり。しよぐんしよるあじう續羣書類從の收むるこの抄の本文、説きざまさしもはかばかしからず文義捉へがたきところさへ少からねど、白き花の林を娑羅樹に擬へたることばかりは疑ふまじきにこそ。

一條禪閣の愚見抄のはじめに、知顯集のことを述べたれど、そこにてこの書の大納言經信卿の筆作と言ひ傳へたれどまことしからずうろんなることのみ多くて昔物語の本意を失へることをつばらにことわりて、はてにこの知顯集、後の世の人の經信卿の名を借りて擬作せるにやと言ひてやみたり。げにこの知顯抄經信の筆になりしといへることこそまことしからね、愚見抄の出で來りし長祿文明のころにすでに世にありしことまではまぎれなければ、伊勢物語註釋の内にては古きものにて、近き世の拾穗抄臆断などにはなほ先立ちて流布せりと思ひて誤りなきにたり。たれとも知れぬ人の、白河院のころ大和漢土（もろこし）にわたりて才學いみじかりしかの帥大納言經信にことよせて作れりしものなるめれども、作者たれにてもあれ、伊勢物語のここかしこまかに讀み解かむとせば、この知顯抄一たび披（ひら）き見ではあるまじくて、一條禪閣のせしごとくむげに言ひ落すべきにもあらじ。

おほかた古き假名物語を學ばむに、今の世の人、契沖阿闍梨より後の學匠の釋義を好み尊ぶあまりややもせば古き諸抄をなほざりにするがごとくに見ゆることなきにあらねども、ここにしばらく業平朝臣の花の林の歌のみにつきて考へむに、知顯抄の説きやう近き世のかしこき人の筆になれる臆斷古意新釋の記すところにたちまさりて見ゆるぞげに思ひのほかなりといはまほしき。

(令和三年一月十四日受附)